

哲学とアートのための12の対話——『現代』を問う

第12回：不死と月見草

2024年3月9日（土）14:00 京都芸術センター大広間

【細胞とは本来死なないものである】

...生き物にとってそもそも「死は宿命ではない」という意味の話聞いた。細胞生物学の専門家であり、二回ほど直接対談させていただく機会を得た、大阪大学名誉教授の吉森保氏である。「オートファジー」という分野における世界的な第一人者だ。「オートファジー」というのは、細胞が自分自身を分解する（つまり自分で自分を食べる）という機能のことである。細胞がどうしてそんなことをするのかというと、それによって老化したり異常になった部品を壊して作り直したり、病原体に侵された部分を除去したりして、恒常性を保つためらしい。ちょうど、車をただ乗り続けているとだんだん古くなってしまいが、車体のいろんなパーツをたえず少しずつ外して修理したり新しいものに置き換えていけば、いつまで経っても新車のままであるようなものだと言う。いってみればオートファジーが動き続けるかぎり、生き物は老いることも死ぬこともないということである。[※]

この話を聴いて私は、生命というものに対する見方がかなり変わった。というのもそれまで、生きとし生けるものにとって死は避けがたい宿命だというふうに、何となく考えてきたからである。また、生は脆く儂いものだというイメージを持っていた。だが吉森先生によると、オートファジーを備えた生命活動は実はきわめて強靱であって、それ自体としてはいつまでも動き続ける本性を持っている。いわば細胞は本来「死なない」ものだということである。それでは実際に私たちが老いて死ぬのはなぜなのか。それは、何らかの理由から、本当は死なないはずの細胞に老化や死がセットされているから、つまり時間が経つとだんだんオートファジーが働かなくなるように、ほとんどの生物はプログラムされているからなのである。

このように言うとまた私たち現代人はすぐに、ではそのプログラムを書き換えれば不死の身体になれるのでは？などと中学生のような想像をしたがる。肉体の不死が本当に望ましいことなのか、不死とはそもそも何を意味するのかを、ちゃんと考えたこともないからである。私はもう中学生ではないので、たとえば細胞のプログラムを書き換えて不死になれるとしても、そんなことにはあまり興味がない。そういう不死は、個人にとっても人類にとってもたいして意味のないものだと思う。この拙論で私が問題にしている「死なない」こととは、そうしたたんなる時間的持続としての「不死」、つまり生命活動の永続化のことではない。技術的に実現されるかもしれないそうした「不死」は、まあそれはそれでSF的には面白いかもしれないが、私がここで言おうとしている「死が存在しない」状態、「死なないこと」とは、まったく異なったトピックなのである。

（吉岡洋「美学のアップデート⑦—死なないために」『ひらく』10号、2024年、p.162-163）

※吉森保『最先端の生命科学を私たちは何も知らない』（日経BP、2020年）、『生命を問いなおす—科学・芸術・記号（叢書セミオトポス）』（日本記号学会編、新曜社、2023年）

【私たちは〈死〉とは何かを知っているのだろうか？ ①】

...多くの人は死を、無に帰することだと考えている。生とは〈有る〉こと、死は〈無い〉ことだと。こうした考え方は、身近な者を死によって失うという経験、つまりあくまでも〈生者〉の側からしかものをみえないといえる。それは、**死を存在/無という論理的カテゴリー**で捉えうるという前提に立っている。しかし、本当にそんなことができるのだろうか。生物個体が生きるということは、身体という情報機械が、周囲の環境からある程度の独立性を保ちながら一定期間駆動し続けることである。人間の身体という情報機械は、人間が作り出さうどんな機械よりも桁外れに複雑なものではあるけれども、それでも機械であるかぎり、それは限定された存在である。外的実在の世界からデータをとり込み、それを処理・加工して世界を解釈するぼくたちの能力も、したがって極めて限定されたものであることはいままでもない。だが、死はそう

した個体としての情報機械それ自体の解体なのだから、死という事実はそうした個体という限定を越えた、より深いリアリティに属しているはずである。存在／無という対立は、確かに現在のぼくたちの思考システムのなかでは有効で不可欠なカテゴリーだけれども、しょせんは進化のある段階におけるぼくたちの脳にとってのみ意味をもつカテゴリーであり、実在する宇宙とは直接関係がない、ということのほうがずっとありそうなことである。

つまり死とは本質的には、何らかの客観的な「出来事」とは異なる何かなのである。

死が「出来事」でないとすれば、それは事故のように突然襲ったり、その到来を人間によって恐れられたりするようなものでは全然ないことになる。少なくとも死は、「無に帰する」などといったこととは全然別な事実なのだろう。こういって、いわゆる「死後の生」を肯定しているようにみえるかもしれない。だが、「輪廻」や「死後の生」といったものがぼくたちの想像する通りの姿で〈存在〉するというのも、同じ理由からやはりありそうもないことだ。そうしたものもまた〈生者〉の観点、ぼくたちの脳という限定された思考機械が産出した空想だからである。このように考えてくると、死という問題に至る道を阻んでいるのは、ぼくたちの思考そのものであることがわかってくる。そして、ぼくたちの思考を現在のような仕方では制御しているのは、存在／無といった二項対立によって限定を受けている、ぼくたちの言語そのものなのである。

(室井尚・吉岡洋『情報と生命——脳・コンピュータ・宇宙』新曜社、1993年、p.196-198)

【私たちは〈死〉とは何かを知っているのだろうか？ ②】

室井尚との交流にまつわる記憶は多いが、亡くなった数日後に突然思い出した、二〇年以上も昔のある場面がある。一九九九年の夏、ドイツのドレスデンで国際記号学会の大会があり、二人とも参加していた。文化人類学者の山口昌男が遅れて到着すると聞いたので、彼が宿泊する予定だというホテルのバーで、二人で待っていた。山口さんはなかなか現れず、かなり長い時間、ビールを飲みながらいろんな話をした。その時どういう流れであったか室井が「死は人生の終わりではない」というようことを言い出した。死に至る肉体的苦痛はできれば避けたいが、自分には死そのものへの恐怖はなく、むしろ、死によって何が起きるのか楽しみだと言う。それまであまり二人で話したことのない話題だった。わたしは彼の考えにおおむね同意したが、同時に、他人の死は現象として観察できるが、厳密に言えば自分の死は、経験も観察もできないのではないか、と言った。それは、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』中にあった次のような命題を思い出したからである。

死は人生における出来事ではない。人は死を経験しない。

永遠がもしも際限のない時間的持続のことではなくて、むしろ無時間性のことであるとしたら、現在に生きる人が永遠に生きるのである。

私たちの視野に境界がないように、私たちの人生には終わりが無い。

(ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』6.4311)

「死なない」とは、文字通り「永遠に生きる」と言い換えることができる。だが「永遠」とは、そもそも何なのだろうか。この問いに対して私たちはあまり考えもせず、まるで当たり前のように、永遠とは限りない時間的持続だと、反射的に答えてしまうのではないだろうか？ けれども無限の持続なんて、実際には経験できるわけがない。すると少しでも永遠に近づく努力が重要になるのであるだろうか。つまり、個人の人生や人類の文明ができるだけ終わらないようにすること、生の時間ができるだけ長く存続することが、望ましいのだろうか。それはつまり「延命」であり、「持続可能性」ということだ。

もちろん、ただ生きてればいい、持続が長ければいいという単純な問題じゃない、という程度には、私たちも一応反省はする。つまり量だけじゃなく、「ウェルビーイング」とか「QOL (生活の質)」とか、「質」的側面も重要だということである。たしかに、人生の価値や幸福は単純な量的指標では決まらず、多くの要因が複雑に絡み合っていることはその通りだし、それを数値的に評価する試みは、それはそれとして面白い。だがそれは、世界にはそうした評価には絶対に現れてこないこと、本質的に分からないことがあることを、認識した上での話である。

(吉岡洋「美学のアップデート⑦—死なないために」『ひらく』10号、2024年、p.165-166)